

1 問題と目的

生活科の内容の1つに飼育活動がある。飼育活動の大きなねらいは、動物を子ども自らの手で飼うことを通して、身近な動物に興味・関心をもち、生命をもっていることや成長していることに気付くとともに動物を大切にすることができるようにすることである。新学習指導要領(2008)でも動物の飼育活動のさらなる充実を挙げ、繰り返し動物とかかわることで生命ある物を大切にすることを育まれるので継続的な飼育活動をするよう明記している。

こうしたねらいを達成するために、これまでに各学校で様々な取組が行われ、それに関する実践も多く報告されている。その多くは、子どもたちは動物飼育を通して、生命を尊重することの大切を学んだり、動物の持ち主とかかわることで人とかかわることの大切さを学んだりできるというものである。また、荒川(2006)は、生命尊重や人とかかわりの大切さだけでなく、動物飼育を通して子どもたちが主体的に学ぶようになった姿を報告している。

私自身、これまでにウサギやチャボ、ヤギ、ポニーの飼育活動を経験した。これまでの先行研究にもあるように、どの動物飼育でも子どもたちは、それぞれの生命を育むために一生懸命協力して世話をし、赤ちゃんが生まれれば新たな小さな生命に感動することもできた。また、動物の持ち主の方に貸してくれるようお願いしたり、困ったことが起こると相談にのってもらったり、餌を工面するために学校の近所の食堂へ自ら出かけ野菜屑を分けてもらったりと、人々と主体的にかかわる子どもたちの姿を目の当たりにしてきた。この点においては、これまでの報告に共感できる部分が多いし、学校で飼育活動をすることの意義は大きいと感じている。

しかし、尾矢(2001)は、学校の中で飼育活動をする意義や成果を認めながらも、生活科での学びが総合的な学習の時間の土台となり、今後の自分の生活に生かせるような実践的な力を育むためには、動物と社会生活とのかかわりを感じ取らせることが大切であると報告している。そのためには、その動物が社会の中でどういった価値をもち、人と動物がどのようにして生きているのかということを感じ取ることが必要であり、その手立てとして学校で飼育活動するだけでなく、その動物が飼育されている農家へ行き、動物と農家の実際のかかわりを見る必要があるとしている。

学校での飼育活動は、子どもたちが世話をしやすいようにできている特別な飼育環境の中に動物を連れてきて、ややもすると命をながらえさせることだけが、いつのまにか目当てになってしまっていることがある。動物と触れ合いつつも、手軽に手に入る干草や飼い主から指定された固形飼料を決められた量だけ与え、不衛生にならない程度に掃除をするというような画一的な世話に終始していたこともあったと、これまでの実践で反省することもある。確かに、尾矢のいうように実際の生活の中での動物の生き方や価値について学ぶことができれば、学年が進んでも、学校を離れても動物に関心をもち続け、生命ある物を大切にしようとする心が育まれていくであろう。

ただ、ヤギのように家畜として飼育されている動物であれば、その動物がもっている社会の中での価値について子どもたちは比較的気付きやすいが、ウサギのようにどちらかというペット的存在である動物になると、社会の中での価値という部分は子どもたちにはとらえにくいと予想される。そこで、社会の中の価値という視点にだけこだわらず、動物飼育を通して、生命尊重以外にも動物と自然、社会生活とのかかわりについて考えを深めていければ、自分の身の回りにあるものを見直したり、たらえ直したりして、新たな働きかけをしていくことが可能なのではないかと考えた。また、こうした見方・考え方は、33

して、その姿に基づいて子どもが自然や社会をもとらえることのできる要件や飼育活動のあり方について考察する。

2 研究の方法

県内の公立A小学校の1年生（男子1名，女子6名，合計7名）に対して，平成21年5月から7月までに行った「ウサギさんといっしょに」の単元を考察した。その単元の中で，子どもがウサギの飼育活動を通して自然や社会生活についてとらえたり，考えたりしている姿を，実際の言動や作文等をもとに見取った。そして，そのような飼育活動を可能にする要件について考察した。

3 活動の実際

(1) 学習材の選択

A小学校では，これまでにヒツジ，ヤギ，ウサ

との戦いでもあった。それでも、自分たちで飼いたいと願い、日々成長するウサギと一緒に過ごせることは楽しみでもあった。初めてウサギと対面したとき、掌に乗るくらい大きさだったのに、両手に乗る大きさ、抱える程の大きさと目に見えて変化していく様子は、子どもたちにとって成長を実感するのに十分だった。

ある日、B児が当番の仕事を終えて教室に戻ってきた時、「先生、チョコちゃん（毛の色から子どもたちが命名）の顔の下辺りを撫でたらね、気持ちよさそうな顔をして目を閉じるんだよ。それにね、顔の下辺りを触るとドクドクしているんだよ」と報告してきた。そして、「顔の下辺り」がどの辺りになるのかを説明するために自分の首元を触った。その瞬間、「あっ、どうしよう。私、ウサギじゃないのにドクドクしている」と自分の頸動脈から感じた脈拍に驚きの声をあげた。他の子どもたちも集まってきて自分の首元を触り、「本当だ。チョコと同じだ」「チョコちゃんと同じじゃなくて、チョコちゃんが私たちと同じなんだよ。心臓が動いているんだよ」と話し始めた。子どもたちにとってウサギも自分たち人間と同じように生きていることを実感できた瞬間だった。

〈児童の作文から〉

きょう、はっけんしたよ。チョコちゃんは、かおのしたをなでなでしてあげると、きもちよさそうにめをとじるよ。きもちよすぎて、ねむくなるのかな。それから、もっとだいはっけんしたよ。チョコちゃんのかおのしたは、ドクドクするんだよ。わたしのかおのしたもドクドクしたよ。チョコちゃんもわたしもドクドクしているから、いきているんだね。みんなもせんせいもドクドクしていたよ。チョコちゃんとおなじだよ。みんなげんきにきているんだよ。ママもきつとドクドクしているんだらうなあ。（B児）

(3) 自然を見つめた餌集め

餌として与える草は、アキノノゲシ、ヤマソ、クズの葉である。野草なら何でもよいというわけではなかったため、子どもたちにとって草集めは容易なことではない。竹田さんから様々な草を与えてみて、食べ残った草は食べない草、なくなっている草は好みの草だと見分ければよいとアドバイスをもらったものの、子どもたちは、草をきちんと見分けることができるのか不安に感じていた。

しかし、竹田さんから実際に草を見せてもらった子どもたちは、簡単に見つけられると感じた。指定された草は、動物飼育の活動と並行して行っていた草花遊びの活動で使った草と同じように見えたからである。アキノノゲシはチクチク葉っぱと名付けていた葉に似ていたし、ヤマソは洋服に張り付けて遊んだ、通称くつつき葉っぱに似ていた。クズの葉は、大きい葉をよく取り、草花サラダの皿として利用したり音を鳴らして遊んだりしていたからである。子どもたちは、草花遊びの経験からそれらの葉がある場所が分かっていたので、容易に草を見つけて摘み、自信をもって与えた。

ところが、翌日、与えた草がほとんど残っていることが分かったと、子どもたちの自信は不安へと変わった。そこで、残った草の形や葉の表面の様子に目を向けるように声をかけた。すると、アキノノゲシだと思って与えた葉っぱにはとげがあるのにアキノノゲシにはないこと、ヤマソだと思って与えたくつつき葉っぱには、全体的に丸みを帯びているものと切れ込みがある葉の2種類があることに気付いた。実は、子どもたちがアキノノゲシだと思っていた葉はアザミだった。どちらも細長く、切れ込みの入った形をしているが、手触りが全く違う。また、ヤマソだと思っていた葉にはアカソが混じっていた。どちらも洋服に張り付く葉であるが、切れ込みの有無という点で違いがある。草花遊びの活動をしていた子どもたちは、様々な草花を手にしても葉の形状や草花のつくりにあまり目を向けることがなく、「草」というひとくくりでとらえていた。しかし、餌となる草集めでは、注意深く草花の形状に目を向け、葉の形や手触りなどの観点に気付き、違いを見出していくことができた。これ以降、子どもたちは、チクチク葉っぱはアザミ、くつつき葉っぱはヤマソ、アカソと呼ぶようになった。

草花の形状に目を向けられるようになった子どもたちは、葉の色の違いにも目を向けた。餌としてクズの葉をあげようとしたC児は、濃い緑色の葉と黄緑色の小さい葉があることに気付いた。大きくて濃い色をした葉の方が喜ばれるに違いないと思ったが、取りづらさから足元にまで伸びてきていた黄緑色の小さな葉を一緒に取って与えた。翌日、黄緑色の葉が食べつくされ、緑色の葉が残っていることを知ったC児は、祖母が畑仕事で言っていたことを思い出し、クズの葉とハウレンソウとを結び付けて右記のような作文を書いた。弱々しく感じられた色の葉は新芽であること、その新芽は出たばかりなのでやわらかいこと、そして、私たち人間と同じようにウサギも新芽を美味しく感じているということに気付いたのである。

〈児童の作文から〉

チョコちゃんは、おいしいさをしていてるみたいです。くずのはっぱをあげるとコリコリしたところと、うすいみどりののはっぱのところだけたべます。わたしは、うすいみどりよりおおきくて、こいみどりののはっぱがおいしいとおもいました。でも、ばあばが、「あたらしいはっぱは、やさしいみどりいろをしているんだよ。しんめっていって、やわらかいんだよ」とはたけでほうれんそうをそだてているときにいっていました。

だから、うすいみどりのいろのくずのはっぱは、しんめです。やわらかくておいしいです。だから、チョコちゃんは、うすいいろのはっぱをたべているから、おいしいさをしてるんだとおもいました。

こんど、くずのはっぱをとるときは、うすいみどりののはっぱをとってきてあげます。まっけてね、チョコちゃん。（C児）

この作文の内容を他の子どもたちに紹介した。すると、葉の色の違いに気付いてはいたけれど、それが新芽であるということを知った子や、その葉がクズの先端に多くあることからクズの葉が日々成長していることに気付いた子、自分たちもヨモギ団子作りをした時にヨモギの先端部分がやわらかいと言って摘んだことと結び付けて考える子など、植物の育ち方と関連させてとらえることができた。この意見交流の後、アキノノゲシやヤマソも同様にやわらかそうなところを取ってきて餌として与えるようになった。

(4) 生活を見つめた餌集め

天候がよくなるとバケツの中の水温が上がり、前日の昼休みに集めてバケツの中で養生しておいた草が、翌朝には、元気がなくなってしまうことが多くなった。そこで、D児は、少しでも新鮮な草をあげたいと登校前に草を摘んで持参してくるようになった。バス通学のため、朝、7時には家を出なければならず、それまでに制服に着替えたり、持ち物を準備したりするのは、1年生のD児にとっては大変なことであったと予想される。それでも、新鮮な草を与えるとウサギが喜んで食べるので、それを張り合いに早起きをするなど自分の生活時間を見つめ直し、前日までにやっておくことと当日するべきことを意識する等、飼育活動を通してまさに自立への基礎を養うことになった。

また、D児は、家の近くで祖母と一緒に草を調達する際に、除草剤の存在を知る。茶色く枯れた部分は、除草剤がまかれたあとであること、その除草剤が生き物にとって有害となることを祖母から教わった。初めは、除草剤の存在を知り、その部分の草は餌として使用できないという意識だけだったので、友達に「茶色いところは、葉がまかれているから取らない方がよい」と情報提供していた。それを聞き、他の子どもたちも、それなら茶色く枯れたところの草は取らないことにしようという程度の意識だった。

しかし、雨の日にその薬が流れて、他の部分にまで及ぶのではないかと心配になり、「雨で流れるかもしれないから、うんと遠くまで草を取りに行った方がよい」とみんなにアドバイスしたあたりから除草剤を使用することの是非について考えるようになった。実際に除草剤を使用した場所の近くには人家があり、畑もあるので、安全性に十分留意した除草剤を使用していると考えられるが、子どもたちにとっては、「草を枯らせる＝毒＝ウサギが困る」という構図が成り立っているようだった。餌となる草集めから実生活を見つめることができるのではないかと考えて、D児の作文からみんなで除草剤の是非について話し合うことにした。

自分たちが世話をしているウサギは、山へ返すことが前提になっている。再び、自然の中へ戻すのである。戻った先でウサギが自分で食料となる草を調達すると考えた時、ウサギの周りには自然がいっぱいであってほしいと願う子どもたちである。除草剤を使わないようにおばあちゃんに頼めばよいのではないかと、除草剤を使っている人たちにそれは毒だと教えて使用を控えてもらってはどうか、自分たちが草取りを手伝うから除草剤を使わないでとお願いする等、ウサギを中心に除草剤について考えた。一方、D児は、自分の祖母や近所のおばあちゃんたちの立場も考慮し、必要に迫られて除草剤を使わなければならない人もいるのだから、使用する場所を考えて使えばよいのではないかと主張した。

D児の家以外でも除草剤を使っている家はある。C児は、除草

〈D児の作文から〉

きょう、チョコちゃんにしんせんなくさをあげようとおもって、はやおきました。あさどりは、しんせんだったって、おばあちゃんがいていたからです。

おばあちゃんといっしょにくさをとりにいきました。わたしが、くさをとろうとしたら、おばあちゃんが「ここは、だめ」っていいました。どうしてってきいたら、おばあちゃんがこういいました。「ここは、くさをからせるくすりがまいてあるからだよ。くすりは、どくだから、チョコちゃんがたべたらたいへんだよ」といいました。

ちやいろくなっているところは、くさをからすくすりがまいてあるんだって。びっくりしました。ちやいろくなっていないばしょは、ちょっととおかったです。バスにおくれたらどうしようって、ちょっとしんばいになったけど、だいじょうぶだったよ。

チョコちゃんが、あさどりのくさをよこんでくれたから、きょうもはやおきて、あさどりました。くすりをまいていないところをさがしました。どくがあったらたいへんだからです。ちやいろじゃないところは、とおかったです。

おばあちゃんのはたけのちかくのどてもちやいろかったです。おばあちゃんに、どくなのに、どうしてくすりをまくのって、ききました。そうしたら、おばあちゃんがこういいました。「くさをとるのがたいへんだからだよ。おばあちゃんは、あしがわるいから、くさとりがたいへんだから、くすりをつかうの。くさがはえたままだと、よそのうちにめいわくがかかるから、だめなんだよ」といいました。

わたしのおばあちゃんのためには、くすりはいるけど、チョコちゃんのためには、ないほうがいいです。おやまには、くすりをまかないでほしいです。

きょう、チョコちゃんのためにははやおきて、くさをとりました。きょうは、あめだったので、すっごくたいへんでした。くすりが、あめでながれて、みどりのところもくすりがきているかもしれないです。だから、いつものあさどりのばしょより、もっとおおくにいかないといけません。だから、すっごくとおかったです。

チョコちゃんのおかあさんたちが、おやまのうえにいったらいいとおもいました。おばあちゃんのはたけのちかくのくすりが、あめでながれないところでくさをたべてほしいです。

みんなは、くすりをやめればいいっていったけど、わたしのおばあちゃんが、こまります。〇〇ちゃんのおばあちゃんみたいに、あしがげんきじゃないから、くさをとるのがたいへんです。わたしも、ほんとうはくすりをやめればいいっておもうけど、おばあちゃんがこまります。おばあちゃんだったって、やめたいとおもっているけど、あしがだめだからこまります。ほかにちやいろいところがあったから、そこのおばあちゃんたちもこまるとおもいます。だから、おばあちゃんは、つかっても、おやまには、まかないでほしいです。

剤の存在を知らなかったが、茶色くなっている場所が除草剤を使ったあとだとD児から聞き、自分の家の畑へ行く道が茶色になっていたことを思い出した。この地域では、山の斜面を耕して畑にしている。山道はあつという間に草がおおい茂るので、定期的に草刈機で刈るか、除草剤を使用する等して手入れをしている。C児の家では、草刈機と除草剤を交互に使用し、畑までの道を手入れしている。自分の家の畑が山にあることから、山に除草剤をまかないでおけばウサギに影響しないという問題ではないと悩んだ。

結局、除草剤を使うべきか、やめるべきかについては、結論には至らなかった。もちろん、除草剤の是非について結論を出そうと考えていたわけではない。除草剤の存在さえ知らなかった子どもたちが、実生活の中で利用されていることを知り、それを使うとどうなるのか1年生なりに思いをめぐらすことができればよいと考えていた。ウサギの飼育活動を通して、1年生なりに実生活を見つめるきっかけになればよいと考えていたのである。子どもたちは、どうしたらよいか真剣に考え、話し合った。餌となる草集めから、自分たちの生活、地域の生活に着目することができたと考える。

〈児童の作文から〉

わたしのばあばもくすりをつかうことがあります。でも、やさいのところではつかいません。でも、はたけがやまにあるから、やまでくすりをつかうことがあります。やまでつかわないにすると、ばあばが、こまります。ばあばは、きかえをつかえないから、パパがおやすみのときしか、くさとりができません。だから、くすりがないとこまります。でも、チョコちゃんがやまにかえったとき、うちのはたけのみちにきたらたいへんなことになるかもしれません。でも、くすりをつかわないと、ばあばがこまります。どうしたらいいのか、わたしもこまります。(C児)

4 考察

(1) 命を実感するための要件

動物飼育のねらいは、動物の世話を継続的に行うことで、その動物が生命をもっていることや成長していることに気づき、大切にすることができるようにすることである。このねらいが達成できていなければ動物飼育の意味がない。今回の活動では、「チョコちゃんを撫でたらドクドクしていたよ」と子どもたちが感じ、表現したように、ウサギに触れたり抱いたりする中で、生きていることを実感することができた。自分と同じ脈拍や鼓動を感じ取ったときの「ウサギは生きている」という言葉には、実感が伴っていた。ウサギが生きていることは、自分や友達、先生、そして家族が生きていることと同じことであると結び付いた瞬間であったと考える。

このように実感を伴った命を感じ取るためには、ウサギが学校の飼育環境に慣れたり、子どもたちがウサギに慣れたりするための時間が必要である。いくらウサギが小型でもどの子もすぐに触れることができるわけではない。また、ウサギも学校の環境に慣れるのに時間が必要である。ウサギが警戒心をもち、緊張状態にあれば、子どもが触れたくても暴れてしまうことが予想され、お互いによい状態でかかわることができない。子どももウサギも焦らず、じっくり、そして繰り返しかかわれるように飼育期間を設定することが大切である。

また、ある期間、一緒に過ごすことで大きくなっていく様子や食べる餌の量が増えていくこと等からも生きていることを実感できる。今回は、2ヵ月半であったが、子どもたちは2日に1回当番が回ってきたので、毎日のようにウサギにかかわることになった。2ヵ月半の間ほぼ毎日かかわることで、子どもたちもウサギもお互いに慣れ、リラックスした状態で接することができた。一時的ではなく、ある程度継続的な飼育活動が可能で、実際に触れることができるような動物を選択することも飼育動物の命を実感することを可能にすると考えられる。

(2) 飼育動物から自然をとらえるための要件

子どもたちは、ウサギの餌用の草集めをしながら、植物の葉の形や色に着目していった。これまで漠然と「草」または「雑草」と大きなくくりでとらえていた植物だったが、草にも様々な種類があること、葉の形やつくりが似ているようだが、それぞれに違いがあることに気付いていった。また、葉の色の違いから、新芽の存在を知ったり、その新芽の出ている場所から草が成長していくときの様子や順序に気付いたりした。草花遊びの中で様々な葉を使っていた子どもたちだったが、遊びの中では遊ぶことが目的になっていたため、葉の形や茎の太さなどを利用して遊んでいても植物のつくりとしてとらえることはなかった。3年生の理科の学習内容の1つに「身近な植物を探したり育てたりして、成長の過程や体のつくりを調べ、それらの成長のきまりや体のつくりについての考えをもつことができる」というのがある。葉の形に着目したり、成長していくときの様子をとらえたりすることは、まさにこの内容につながるものである。

このように飼育動物を通して子どもたちが自然をとらえることができたのは、決められた餌を一定量与えたり、決められた範囲内の草を自由に食べさせたりするといった飼育方法でなかったからである。そうした餌やりでは、食べた量を気にかけることはできるが、草の種類やつくりにも着目することは難しい。自分たちで見つけ、調達すると

いう活動があったからこそ気付くことができたと考える。飼育動物を通して自然をとらえられるようにするためには、与える餌や給餌方法について考える必要があるといえよう。すなわち、飼育動物にもよるが与える餌や給餌方法を工夫すれば、子どもたちは発展的な内容を学習することが可能になるのである。

(3) 飼育動物から生活をとらえるための要件

ここでとらえる生活とは、大きく2つある。1つは、自分自身の生活である。もう1つは、社会生活である。

ウサギの飼育が始まったことにより、子どもたちはそれまでの自身の生活を見直していく必要に迫られた。登校してから10分間で身支度や学習準備をした上で、餌やりをしなければならない。また、昼休みにいつも食い込んでしまっていた給食も時間を意識して食べなければ、ウサギ小屋の掃除ができない。入学当初、着替えだけで10分かかっていた子どもたちもどうしたらウサギのために時間を作ることができるのか、自分の行動を振り返っていた。

これは、自分たちで動物飼育をしたいと願い、自分たちで飼育する動物を決めたことによる。教師から世話することを義務づけられた飼育活動であったり、与えられた動物であったりすれば、飼育活動への意欲は大きく半減し、その動物のために頑張ろうという気持ちにはなれなかったであろう。子どもたちが自身の生活を見直すきっかけにするためには、動物飼育への意欲付けと、かかわっていく動物の選択方法が重要であるといえよう。

本実践では、社会生活をとらえるためにD児の作文の内容をもとに除草剤の是非について話し合った。内容的には難しかったが、自分たちの身の回りにある社会生活に目を向けるきっかけになった。命の大切さを感じることに焦点化された動物飼育であれば、この活動が終了した時、「動物を飼育したことがある」「飼育した動物はとてもかわいらしかった」という思いだけで終わっていたかもしれない。しかし、除草剤の是非について話し合ったことで、人と動物とがどのようにすれば共存できるのかについて考えることができたし、動物は学校の飼育小屋にいるものではなく自然の中で生きているものであると1年生なりにとらえることができた。

これは、D児のような気付きを全体に広めたり、その気付きについて意見交流する場を設定したりしたからである。飼育活動と実際の生活を関連付けることができる内容は、1年生には難しすぎる、特定の子の気付きにしかすぎないと流してしまうのではなく、その気付きを全体に広め、共有することが大切である。実際の生活と関連付けた見方や考え方は、総合的な学習の時間の内容にも、学習方法にもつながっていくことが期待できるので、機を逃さず気付きを紹介したり深めたりすることが大切である。

(4) 自然や社会をとらえることのできる飼育活動の要件

飼育動物が生命をもっていることや成長していることに気付き、命を実感できること以外に、子どもが動物を通して自然や社会をとらえることのできる飼育活動の要件は、次のようにまとめられる。

- ① 継続的な飼育活動をすること。
- ② 与える餌や給餌方法を工夫できる動物を選択すること。
- ③ 機を逃さず気付きの共有化を図ること。

5 課題

学習指導要領解説生活編で、「どのような動物を飼育するかについては、地域や児童の実態に応じて適切なものを取り上げることが大切である」と述べられているように、地域の実情や学校の立地条件に合わせて飼育する動物を選択することが大切である。動物によって与える餌も違うので、自然とのかかわりが見えづらい場合があると予想される。今後は、飼育する動物によって何をとらえることができるのか、動物の特性を考慮しながら探っていきたい。

6 文献

- 荒川紀子。「子どもと動物が深いかわりを持ち、主体的に学ぶ姿を目指して—中型動物の飼育活動における場の設定・活動の工夫・継続性に着目して—」. 教育実践研究第16集. 上越教育大学学校教育総合研究センター. 2006
- 尾矢貞雄。「学校に囲い込まない飼育活動—ヤギ飼育農家に通い、人とヤギの生活を知る体験—」. 教育実践研究第11集. 上越教育大学学校教育研究センター. 2001
- 文部科学省. 小学校学習指導要領. 2008
- 文部科学省. 小学校学習指導要領解説 生活編. 2008